

中長期目標 (学校ビジョン)	安心、つながり、感動にあふれる学校 ～協働と共感の教育～		今年度の 重点目標	1. 信頼と安心につつまれた学級・学部・学校づくり 2. 「本校で学んでよかった」の教育実践と支援の充実・社会参加 3. 病弱・肢体不自由教育実践校としての役割発揮と存在発揮 4. 教師の専門性の向上と授業改革		
評価項目	評価の具体項目	年 度 当 初 現 状	初 目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	評 価 結 果 経過・達成状況	(3) 月 評価 改善方策
信頼と安心につつまれた学級・学部・学校づくり	(各学部) 個々の児童生徒についての共通理解を進め、実態に応じた指導・支援の充実に努める。	児童生徒一人一人の特性、支援方法等について、教職員間の共通理解がまだ不十分である。	教職員が個のねらいにそった適切な指導・支援を行っている。	・児童生徒一人一人の目標・支援方法のわかる資料を作成する。 ・目標検討会や学部会等で定期的に実態・支援法等について確認する。	・子どもを語る会の定期的実施やPC掲示板の活用等を通じて児童生徒に関する情報の共有が進んだ。しかし、関わりの少ない児童生徒(担当していない児童生徒)について、理解するための工夫が必要である。	B ・引き続き、子どもを語る時間の確保やPC掲示板の活用に努める。 ・共通理解の土台となる児童生徒をとらえる視点、支援の根拠となるアセスメントの方法などについて確認及び検討する。 (注:アセスメント…個人の状態像を理解し、必要な支援を考えたり、将来の行動を予測したり、支援の成果を調べること)
	(各学部) 児童生徒の発達や心身の状態を的確に把握し、安心して学べる学級づくりをする。	児童生徒の病気や発達・心身の状態を的確に理解した支援の必要性を感じている。	児童生徒が教職員と心を通わせ、安心して学習に取り組んでいる。	・児童生徒の発達や心身の状態を客観的な指標や関係機関からの情報を活用しながら正確に理解する。 ・児童生徒からのサインや発信の意味・その背景をしっかりと受け止める。	・概ね安心・安全な環境が作れているが、さらに極め細やかな個々への配慮が必要である。	B ・多様化している病気や障がいの状況や児童生徒・保護者の心情の理解に努め、関係機関と連携・協力しながら、より一層細やかな対応を行う。
	(保健安全部) 緊急時を想定した訓練に取り組み、安全で安心な教育環境を整えらるとともに、素早く、正確な対応ができる。	避難訓練、救急訓練、救急ウィークで想定した場所については、素早く、正確な対応ができてつづけるが、校舎内すべての場所の緊急対応にいたっていない。	あらゆる緊急時を想定し、素早く、正確に協力体制を対応できる教職員集団になっている。	・臨機応変に動ける教職員集団になるため、訓練時でも一人一人が考えて動く内容を設定する。	・救急ウィーク等で様々な状況を想定した訓練を計画・実施し、教職員の役割や動きを確認することにより緊急時に対応できる力が身についてきている。 ・臨機応変に一人一人が動くことができるよう、定期的に研修を積む必要がある。	B ・具体的な場面を想定し、一人一人が考えながら訓練できるような計画を立案し、定期的に実施する。 ・緊急時マニュアルや掲示物が、よりわかりやすくなるよう工夫する。
	(小学部) 児童の卒業後の姿をもとに小学部でつづきたい力を明確にし、豊かな生活づくりを進める。	高等部卒業後の将来の具体的な姿をイメージできていない。	社会参加のために、現段階で必要な力を明確にし、学習内容について説明できる。	・卒業生の情報や福祉サービスの状況等について関心をもって収集する。 ・現段階で必要な力について情報交換を行い、指導・支援について保護者の理解・協力をえる。	・個々に対して、卒業後について話をしたり、デイスサービスについて情報交換したりできたが、小学部におけるキャリア教育についての具体的な説明が行き届かなかった。	D ・進路、キャリア教育の研修、情報を計画的に学部内で共有できるようにする。 ・学部懇談でキャリア教育についても計画的に盛り込む。 (注:キャリア教育…一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育)
	(中学部) 生徒の卒業後の姿をもとに中学部でつづきたい力を明確にし、必要な学習を進める。	卒業後の具体的な姿やそのために、どんな学習が必要かが明確でない面がある。	生徒一人一人の将来の具体的な姿についてイメージを共有し、そのための課題を明確にして授業を行う。	・個人懇談等で卒業生の情報や福祉サービスの状況等、保護者へ情報提供し、生徒の将来について話し合う。 ・目標検討会や施設利用体験・職場体験学習の反省会等で、生徒の将来について具体的に話し合い、課題を明確にする。	・施設利用体験や職場体験、懇談の機会等に積極的に話題提供し、個々の生徒に応じた対応について話しあうように努めたが、わからないと感じている保護者や生徒が数名ある。	B ・施設利用体験・職場体験での様子や得られた情報を、資料等を提示してわかりやすく伝えるように努める。積極的に関係をつなぐように努め、新たな改善点や提案をしていく。 ・日々の成果や実践を伝え合い、共通理解したことを実践につなげる。
「本校で学んでよかった」の教育実践と支援の充実・社会参加	(高等部) 生徒の卒業後の姿をもとに高等部でつづきたい力を明確にし、必要な学習を保障する。	今の学習と、生徒の将来の生活とのつながりが不十分で、学習内容の精選が的確でない面がある。	生徒一人一人の将来の具体的な姿についてイメージを共有し、実態に即してわかりやすく授業する。	・目標検討会や職場体験学習の反省会等で、生徒の将来について具体的に話し合う。 ・生徒に十分な情報を提供し、自分の総合的なライフプランが考えられるようにする。	・年次計画で進路に関する学習や保護者への情報提供を進めてきたが、まだ不十分であった。	D ・保護者にはこれまで以上に進路に関する情報提供や、各学年への系統的な働きかけをする。また、実習、体験後に進路懇談を定期的に設ける。 ・進学希望の生徒に対しては、模試を計画的に実施する。 ・卒業後のライフプラン等について学ぶ機会を、家庭科、保健体育等、教科学習と連携して確保する。
	(人権・地域支援部) 家庭と学校・関係機関が連携し、児童生徒がよりよく生きるための支援をめざす。	昨年度、個別の支援会議の実施が増えてはきたが、まだ全教職員・保護者に浸透していない。	保護者・学校・関係機関の支援がつながり、協働しながら、児童生徒の社会生活を支援している。	・個別の支援会議の実施等、連携する機会を設けるよう働きかける。 ・キャリア教育を推進する中で、社会生活を豊かにできるような働きかけをする。	・支援会議の内容等を具体的に紹介することにより保護者・教職員ともに意識の高まりが見られ、専門機関から得た情報を関係機関と共有する機会・場面が増えた。キャリア教育の視点で働きかけているが、全家庭に伝わるまでには至っていない。	B ・現時点で必要感を感じていない家庭にも、わかりやすい情報提供をして啓発していく。
	(各学部) 学習や行事のねらいや児童生徒の様子や成長がわかるように、学級だより、学部だよりの内容を充実させる。	学級だよりや学部だよりを出しているが、学習や行事のねらいや児童生徒の成長を十分に伝えられているとはいえない。	学習や行事のねらいや児童生徒の成長がよくわかり、保護者からの理解や信頼が深まる。	・学級だよりや学部だよりには必ず学習や行事のねらいを示し、児童生徒の様子を知らせる。	・学部だより・学級だより等で行事や学習のねらいや学習の様子を伝えることに努めたが、不十分と感じている保護者が数名ある。	B ・内容構成を検討したり、写真を活用したりして、より関心を寄せてもらう工夫を行う。
	(研究研修部) 他校や療育園等の外部機関と連携し、本校の病弱・肢体不自由教育の専門性を高める。	他校や療育園等と連携し、研修会や勉強会を開催し、教職員全体の専門性をより高める必要がある。	研修会や勉強会、他校や外部機関等から得た情報を実践に活かす教職員が増えている。	・定期的な勉強会や研修会、研修報告会を開催したり、本校や他校の教職員向け通信による情報発信を行ったりし、専門性の向上に活かす。	・勉強会や研修会等を定期的開催したり、通信や書籍による情報発信を積極的に行ったりすることで、それらを活用し、実践に活かしている職員も多くなっている。 ・他の職員に助言する職員も増えてきているが、まだ少数である。	B ・職員が研修できる環境として、引き続き職員が研修したことや得意な分野について情報を発信したり、他教員に助言したりする機会を積極的に設定する。
	(各学部) 授業の公開に努め、お互いに助言し合って授業の改善を図る。	授業を直接見あうことに難しさがあり、工夫が必要である。	自己研修の成果を生かした授業改革について定期的に話し合い、授業公開や研究会を計画的に実施する。	・単一障がい学級、重複障がい学級それぞれで公開の方法を決め、お互いにアドバイスし合う。 ・他校や他県の授業を参観したり、情報交換したりして、授業づくりの視点を広げる。	・研修会で学んだことを生かして授業改善に取り組むことに努めたが、全員が授業公開をし、その振り返りを授業づくりに生かすという点では、他クラスの授業参観が難しい現状にある学部もあった。	D ・学部分掌の中での役割を明確にし、VTRの活用や教材の紹介の場を設けたり、授業公開をしたりして、計画的に意見交換できる体制をつくる。
教師の専門性の向上と授業改革	(研究研修部) わかる喜び・できる喜びのある授業をめざして授業の改革と充実に図る。	各学部ごとに授業改善のポイントが明確になってきているが、小中高の連携による授業改革までには至っていない。	小中高で連携しながら、SPDCAサイクルによる授業改革を行っている。	・各学部の授業改善ポイントを共有し、小中高連携した授業研究会を開催し、学校全体で授業改善に取り組むながら、授業改革を進める。	・小中高で学部をとおして連携しながら、合同で授業改善に取り組む、実践に活かし成果のあった部門もあるが、学校全体で授業改善ポイントを共有し活用するまでには至らなかった。 ・各学部の研究の取り組みや日々の実践事例について話し合う機会を設定したり、通信に掲載したりすることで、学校全体で授業改善について共通理解を図った。	C ・小中高で連携して取り組めるテーマを設定し、学部を超えて意見交換や実践検討する機会を定期的に設ける。